

植 調

第 1 卷
第 4 号

昭和 42 年
8 月 発行

財団法人 日本植物調節剤研究協会編

目 次

そ業のケミカル・コントロールーその二つの姿ー(農林省園芸試験場・そ業部 農学博士 西 貞夫)	1
農薬の残留毒性(2)(農林省農薬検査所 化学課長 柏 司)	4
除草剤の今後の方向(4)(農林省農事試験場 農学博士 荒井正雄)	7
「アジア・太平洋地域雑草防除技術交換会議」 およびハワイの農業と雑草防除について (2) (農林省九州農業試験場 農学博士 野田健児) ...	10
昭和41年度特作関係除草剤試験成績概要	16
新除草・調節剤	20
植調協会だより	23

植物の生育調節資材

財団法人 日本植物調節剤研究協会会長 河 田 党

本会の寄附行為第3条(目的)には、「この会は、植物調節剤(除草剤、植物の生育調節剤および植物の生育調節資材をいう)の開発利用の研究を促進し、あわせてその成果の普及を通じて……」とある。しかし創立以来、除草剤、生育調節剤については数多くの試験委託もあり、それに応じて相当な成果も収め得たと自負しているが、生育調節資材については前年度まで全く触れる所がなかった。幸いに本年度は生育調節資材としてのポリマルチの試験委託があり、試験の進行に伴って、また大いに我々も教えられる所があった。ポ

リエチレンその他の透明膜でマルチすることによって、地温の上昇を来し、低温時の作物の生育を促進するであろうことは、誰しも予期し得る所であるが、さらにこれに伴って、水分の蒸発を減少させると共に水分の地下浸透も抑え、肥料分、特に窒素の流亡逸散を防ぎ、こゝに特殊な土と水と肥料との環境を醸し出す状態は、誠に興味深々たるものが感じられる。ポリマルチに限らず、1つの農業資材の栽培への適用が、色々な面で多岐多様に作物の生育に影響を及ぼし、思わぬ成果へと拡大する場合も少なくないであろう。